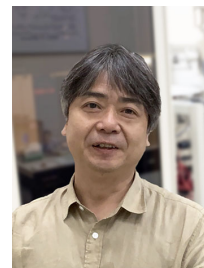


今こそ考えてみる, 学会誌の機能と役割

産業技術総合研究所 物質計測標準研究部門

伊藤 賢志



「よく考えてから行動しなさい」この言葉は多くの方が子供の頃から耳にしてきたことでしょう。しかし、元英国首相ベンジャミン・ディズレーリの「経験は思考から生まれ、思考は行動から生まれる」という真っ向から対立する格言は、特に研究者にとって示唆に富んだ視点を提供してくれます。私たちが研究を進める中で、この「行動から思考が生まれる」というプロセスは不可欠です。純粋で好奇心旺盛な子供たちのように行動を起こし、その結果、特に失敗事例を反省し、分析することで、より深い理解や新たな疑問が浮かび上がります。それがまた次の行動を促し、新しい発見やアイデアに繋がっていくのです。このサイクルこそが、セレンディピティの源、かつ科学的探求の核心であり、研究者の成長を支える原動力となります。

最近、若手研究員とのディスカッションが増えたこともあり、この「行動から思考が生まれる」プロセスに関連して、「言語化」の重要性について改めて気づかされました。研究者同士のコミュニケーションやアイデアの共有において、言語化は欠かせない要素です。自身の考えや発見を適切に言語化することで、論理的思考力を高め、識見を深めるとともに、他者との共感や理解が生まれ、さらに新たなアイデアが生まれる土壌が形成されます。言語化は、単なる情報伝達的手段だけではなく、思考そのものを深化させる手段でもあるのです。

さて、学会誌や学会のあり方について議論が始まっています。情報処理技術とネットワーク機能が高度化する中で、従来型手法の是非が問われています。本誌を企画し、半年ごとに刊行している編集委員会では、定期

的に集まり、掲載記事のアイデアを持ち寄り、放射線化学にまつわる研究動向を踏まえつつ、一つの号にまとめるべき記事を選定し、出稿を依頼するために目当ての研究者に打診します。この一連の作業ではコミュニケーションが重要な役割を果たし、言語と知識の共有が促進されます。つまり、編集委員会の活動は、学会のもつ一つの大きな脳、すなわち学識深化のエンジンとして強力に機能しているのです。

また、学会誌は研究者同士の時空を超えたネットワーク構築にも有用です。論文や記事を通じて研究者たちは互いの研究内容を知り、議論を深めることができ、異なる分野の研究者同士が協力し合い、新たな研究の方向性を見出すことが可能になります。脈々と続いてきた編集活動と研究者たちの知識と経験の集大成として118号を数える本誌は、諸先輩方の研究成果を学び、それを基に新たな研究を展開し、分野を拡張することで、科学の進歩を促進する役割も果たしています。

情報発信のあり方についても、技術革新に応じた「手段と手法」の高度化が必要である一方、「発信のコア」となる知識の深化があつてこそ意味があります。インターネットやデジタル技術の発展により、情報の伝達速度や範囲は飛躍的に向上しました。しかし、どれだけ迅速かつ広範に情報が伝達されても、その中身が伴わなければ意味がありません。学会誌が持つこの素晴らしい可能性を学会メンバーが今一度認識することにより、学会機能の一つとして最大限活用していけるのではないのでしょうか。

経験の蓄積とコミュニケーションの要、あるいは知識と思考の深化エンジンとして、学会誌が持つユニークな機能を今一度見直してみたいかがでしよう。

Let's remember back the ability and role of this journal
Kenji Ito (MCM, NMIJ, AIST),
〒305-8565 つくば市東 1-1-1 中央 5 群
E-mail: k-ito@aist.go.jp